

城攻並攻具

城を攻めることは、やむを得ずして攻めるのである。それと言うのも、元来城というもの、地形に依拠して堀や塀を設け、遠い敵であれば弓・鉄砲等の飛道具で撃ち払い、近くの敵であれば鎗・長刀等の短兵により切り伏せようとして堅固に構えているものであり、そこへ外から仕掛けてその城を乗っ取ろうとするのであるから、人数も多く損傷し、又国内の人民も苦しむことになる。こうしたことから城攻だけはしないと覚悟していても、敵が要害を固め、根拠地を堅く守り、積極的に略奪しているのを放置することもできなくなれば、やむを得ずして攻めるのである。なお、攻めるに至っては、その戦術が巧妙か、稚拙かで違いがある。十分に理解していなければ、人的損害を被るだけではなく、さらに大きな害を引き出すこともある。将たる人は、詳らかに会得しなければならぬ。

○城を攻めることは、敵より五〜六倍の人数でなければ、できないことである。そうはいえども当時の状況によっては、小勢で不意に攻めかかり、あるいは鷹狩りなどに事よせて徒膚攻めすはだ※等を仕掛け、又は夜討等をして、城を抜くこともあるが、これらは皆「臨機応変の術策」であり、定まった方法ではない。

※徒肌攻め(素肌攻め) Ⅱ 鎧冑を着けず城攻めの意思がないことを示して城兵を慢心させ、城外に攻め込ませて反撃し、一挙に城を奪取する戦法。戦例として、武田勝頼の膳城素肌攻めがある。

○攻めると攻められるとの差異を云えば、攻められる者は小勢であっても、自分の国であるから地理もよく承知しており、兵糧や水、薪も容易に入手でき、後詰も期待できるものである。攻める方は大勢であるけれども、他国のことであるから、万事が不

案内であり、何をするにしても不便である。もっとも兵糧が続かないこともあり、又長い間には流言やデマも出てきて、仲間割れすることにもなり、騒動が発生することさえあろう。こうしてうまくいかないことが多いのである。かつ又、籠城する者は必死の覚悟でいるので、人の心気も斉一である。攻める方は大勢であるため、いつも城兵を侮り、驕って油断もできるものである。いずれにせよ、城を攻めるには籠城する者の心理を理解し、籠城するには攻め手の心理を理解していれば、守攻共に拙いことにはならないだろう。

○上述したように、城を囲むことは、敵より十倍も多い人数で取り掛かることであるから、隙間なく囲むことができるが、わざと一方だけを開けておくことも城を囲む習わしである。四方を隙間なく囲めば死地に陥るので、城中一致して必死の覚悟で守ることになり、落とせる城も落とせなくなることがある。このため、一方を囲まないことで城中の気を緩ませれば、人の心が分散して城が落ち易くなる。

これは敵将を目に懸けず、ただ城を奪い土地を占領するのを目的とするときの攻め方である。又、敵将を討たなければ決定的な勝利とならない合戦であれば、この城中に敵将が居ることを確かに知り得た時には、全周を一寸の隙間もなく取り囲んで城ごと丸呑みにし、城中を皆殺しにして根を断ち、葉を枯らすこともあるだろう。冒頓单于ぼくとつぜんう（匈奴の君主）が漢の高祖を白登城に取り囲んだのも、この趣意であった。しかし、单于が無智であったことから、陣平に欺かれて高祖を取り逃がしたのであった。よく考察せよ。※陣平は冒頓单于の夫人に賄賂を贈った。

○城を攻めるのに数多あまたの心得がある。敵が弱くて兵糧も不足しており、後詰も期待できない城であれば、打ち囲んで兵の威厳を示し、絶えず小競合いして城兵を疲れさ

せ、自軍を常に万全にして、夜討等に遭わないよう警戒を厳にし、長期にわたり囲むならば、戦力を費やすことなく城が落ちると云う。

○敵が強く、糧米も多く、後詰もやって来る城であれば、短兵急に攻めかかれ。遅くなれば内外から挟み討ちにされて、大いに難を受けることがある。それゆえ短期間で城を落とせる見込みがなければ、速やかに囲みを解いて退くこともある。当時の状況に応じた権謀によるものである。

○山城によっては前面のみ普請ふしんを丈夫に構えて、後ろは山を恃たのんで普請を加えていないものもある。そのようであれば、前面から激しく攻めかかり、別に人数を後ろの山に廻し、笠落しにして破ることがある。

右の他にも城により、時により、敵により、軍勢の多少にもより、種々の攻め方があるだろう。筆紙に尽し難いところである。多くの軍記を読んで、自ら究めるようにせよ。

○城中の計策により、寄手（攻城側）に無為に日数を送らせようとして、種々の方略を仕掛けてくることがあるだろう。察して明らかにし、それらに対処せよ。

○敵地に踏み込めば、村里の人民が軍兵の乱妨を避けるため、家財妻子を引きまとい、逃れ隠れて、恐れかつ怨むものである。そうであるから、敵地に踏み込んだならば軍兵の乱妨を厳に禁じ、その国の民に指を指されぬようにするのである。そして、人民等が逃げ隠れたならば、所々に高札を立て、厳しく軍兵の乱妨不作法を禁じているので、早々に住居に帰って生活せよという旨を書き付けよ。もし違背して乱妨する者があれば、たちどころに斬きってそこに曝さらし首にし、その地の人民が安堵するようにせよ。このようにすれば、敵国の住民も心服して従うのである。加藤清正はこれらを

理解していたので、朝鮮の土民も親しんで付き従い、軍士と親しく交わったことで、清正の軍士は陣用物資に事欠かなかったのだと聞く。清正の軍法を手本とせよ。

○城を囲もうとするときは、先ず敵の後詰がやって来る経路を考察して、そこに別備を設け、阻止するための人数を置いて、その後に城を取り巻くようにせよ。

○城攻めるときに向城を二〜三ヶ所も取ることがある。その普請は馬防の溝を掘り、虎落もがりを設ければ事足りる。たいそう便利に賢く取るようにせよ。

○城の近くまで押し進んできたならば、けっして油断してはならない。蟄つひのきわ際の一戦と云って、最後に名残ひといくさの一軍を交えてから城に引籠こもる敵もある。この一戦は寄手を散すか、自分が追い込められるかの運命を決定する軍であるから、一段と激しいものになると言えよう。これらをよく心得ておくこと。

○城近くに陣を張るには、城と陣との間に森林などがあれば、その陰に陣を敷け。城から直に見渡される所には、大砲を撃ち込まれるかもしれない。

○城と陣との距離については、定まった方法はないが、近くて五〜六町約五四五・五〜約六五四・五m、遠ければ十四〜五町約一・五〜一・六kmとなろう。もつとも敵城に近づいて陣を敷くときは、数多くの物見を置いて、敵城の様子等を報告させよ。

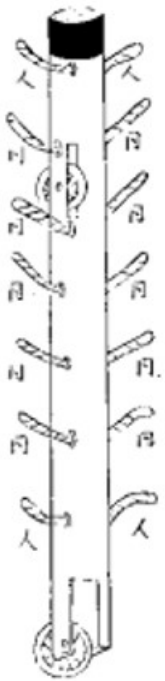
○城攻めの方法については、現在の諸軍家の伝授にも、攻具はこの外不足している。堅固な城であればある程、攻具が拙ますくては落とすのが難しいのであるから、伝授されている攻具以外にもなお書籍を熟読玩味して理解した上で、城地の高低又は普請の巧拙等によって新たな物を製造してこそ、良将の器と云えるのである。

○城攻めは門を破壊するか、塀を倒すか、石垣を掘り崩すかしなければ、突破口が形成されないものである。このゆえに、先ずこの三つを破る工夫をせよ。しかしながら、

門や塀を破壊し、石垣を崩すにも、とにかく寄付かなければ実行できない。そこで先ずは仕寄道具を製作するのが第一の事であると知れ。

○仕寄道具には、厚板で箱を作り、車輪を取付けてこの箱の中に人を乗せて近寄るものがある。又、より高度なものに、箱の外面を牛や野猪いのししの生皮で張り固めて用いるものがある。又、大楯に車輪を取付けて、十四〜六人で一斉に押し近寄るものがある。持楯にて近寄ることがある。竹束にて近寄ることがある。さらにオランダ流に被楯がある。生牛皮で持楯のようにこしらえ、近寄る時には腰をかがめてこれを背上に被り、首から尻までを覆って、数百人が連なって手を取組んで、城に詰寄ることがある。これらの器械をさらに工夫した上で製作すべきである。

○城門を破壊するには、周囲三〜四尺(九〇・九〜一二一・二cm)、長さ三丈(約九・一m)程の大きな木材の頭を鉄で張り固め、この大材に車輪を二ヶ所取り付け、大材の左右数ヶ所に綱を付け、五十人でこの木を牽引し、城門に押向けて一斉に力を合わせて突き当て、打ち破るのである。もちろんこの木を牽く武夫は、各人が持楯を手にして、矢石を防ぎながら詰寄らねばならない。そうして門を打破ることができたならば、器材も楯も打ち棄て、無二無三に城内に斬り込め。これを大功として、重賞を与える。

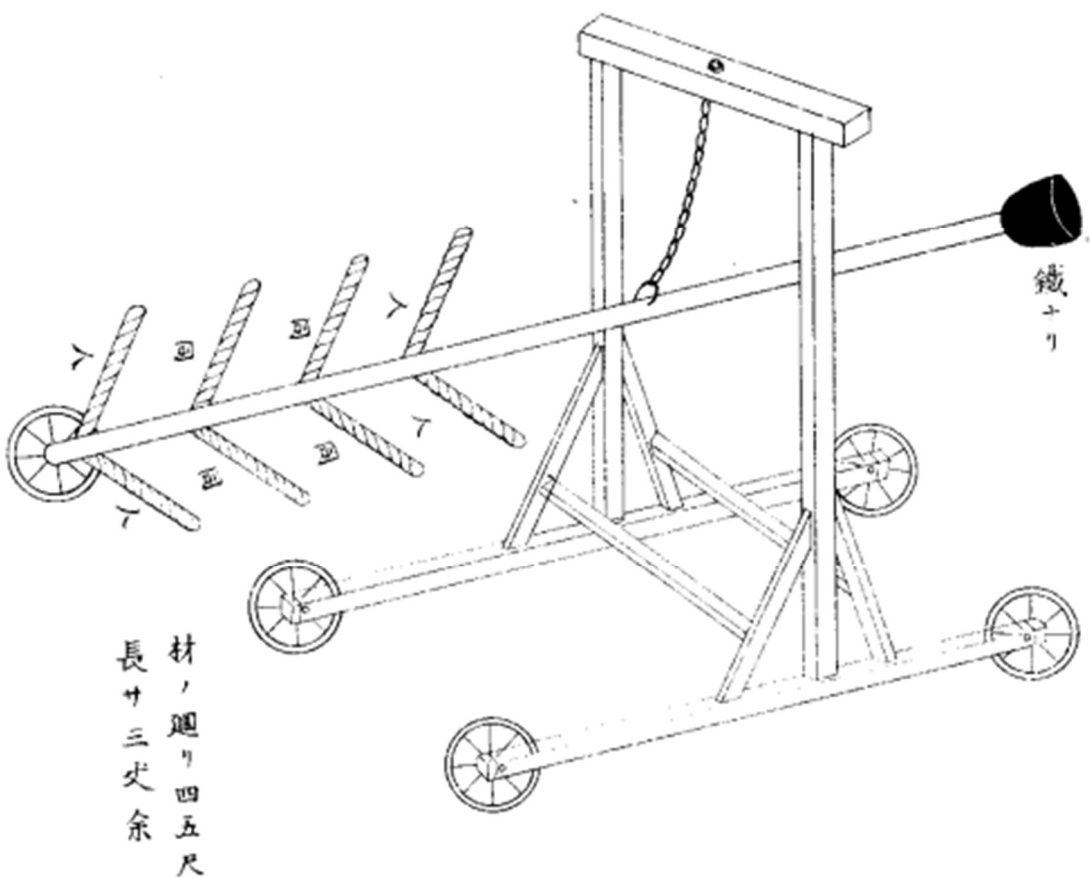


破門材之図

○又、オランダ流に城門の傍ら、あるいは石垣の角付近に鳥居形の器材を仕立て、この鳥居に大材を釣り、その後端の地面を引きずる部分に車輪を取付けることで走りをよくし、鐘を撞く仕組みのようにして、扉を打ち砕き、又は石垣の角石を突き抜く

ことがある。総じてこうした類の器材を製作するには、なお一層の工夫を要する。
○柴や薪を門の際に積み重ねて火を着け、城門を焼き破ることがある。又棒火矢、数
火矢、乱火等により焼き破ることもある。その方法は第一巻目の焼討の箇所で詳しく
述べている。

鳥居撞之圖



○城を攻めるには先ず堀を埋めよ。埋める材としては、在家を壊し、又は柴、萱、畳、
蓆むしろの類を用いる。又土俵（土囊）をおびただしく作り、数千人、数万人に一俵ずつ持
たせて、大急ぎで投げ込んで埋めることもある。全て埋材を投げ込むには、乱雑に分
散させてはならない。一所にまとめて投げ込み、道を形づくるようにせよ。

○塀を破壊するには、切り壊すことがあり、熊手、鎌等を引っ掛けて引き倒すことがあり、大槌で打ち壊すことがある。戦闘が緩やかであれば、柱の三、四本を土際からノコで挽き切^ひって、引いたり押ししたりすれば倒れる。又、細引きの先に三又か四又の木の枝を結び付けて、百本も二百本も投げて引っ掛け、一斉に引けば倒せると云う。

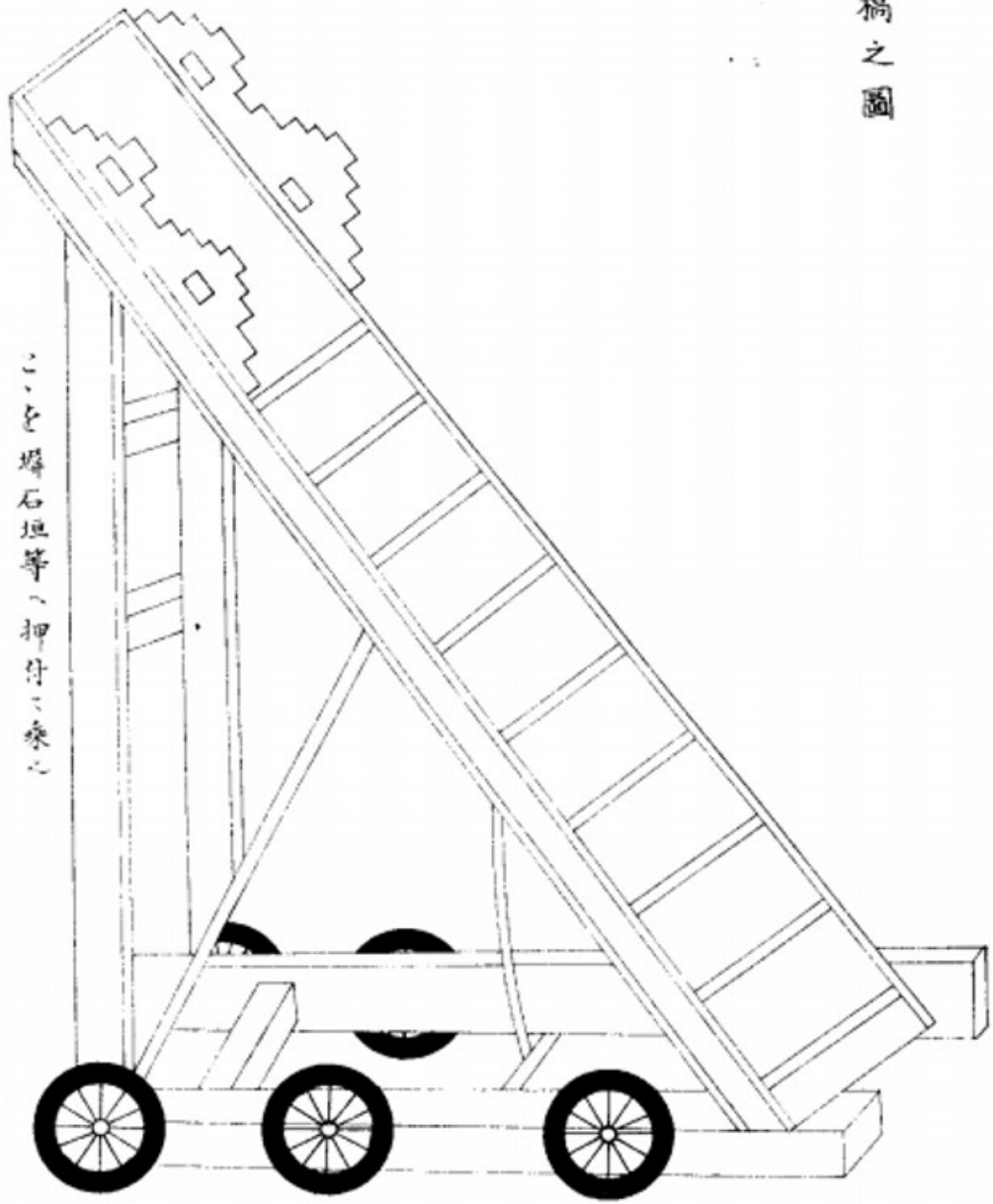
又木の之圖




○塀を乗り越えるには、梯子で乗り越えることがあり、手を掛けて乗り越えることがあり、行天橋と云う物により乗り越えることがある。この他にも楯に横木を取付けて、梯子の代りに用いることもあり、又一本の材木に足を掛ける部分を刻み込んで、塀に倒し掛けて乗り越えることもあり、各様々である。大仏定直^{おほぼつじやうぢく}が千早城を攻めた時、二十余丈（六〇・六m以上）の梯^{かけはし}を造って、切岸に打ち掛けたこともあるので、これを研究せよ。『グレイキスブック』にも守攻の器具が甚だ詳しく載っているので、それらを熟読して製作するのがよいだろう。

○石垣を崩すには、仕寄道具によって寄付き、鉄手子^{かねてし}又は鶴嘴^{つるはし}によって崩せ。隅石を一つか二つ掘り抜けば、余りは崩れ易いものである。加藤清正はこの仕方が得意であったという。又、上述した鳥居撞きにより崩すようにもせよ。

行天橋之圖



○櫓あるいは塀等を崩すには、化粧棚と云う物を込めながら掘り入ることがある。その形は  このようである。この木材を数多こしらえ、掘り入るのに従って逐次に

込めながら、計画した所まで掘り込んでから、その穴の中に薪や萱の類を重ねて火を着ければ、化粧棚が燃え折れて穴が崩れるので、櫓も塀も打ち倒れるのだと云う。

○火攻めは強風の時、風上から在家それぞれに火を着けて、その火炎により城を焼くのである。もし又、在家が無ければ、竹木を山ほど積上げて火を放てばよい。

○水攻めと云うものに二つある。一つは水のない山城等においては、城外から水を引いて用いることがある。その水源を遮断し、城中に一滴の水も無いようにして攻めるならば、枯渴に苦しんで落城に及ぶことがある。もう一つは水はけの悪い城地であれば、低い方に長堤を築いて、高い方から水を流し込ませれば、城地が水に浸って落城

することがある。太閤秀吉がこの術を実際に行なっている。ただし、堤と城との高低は技術的によく計らねばならない。もしも堤が低くて、水を注いでも城を浸さなければ、労多くして功績がないばかりでなく、後々まで笑われることになるだろう。

右の他にも攻具や攻め方はいくらでもあるだろう。時に臨んで創造せよ。攻具を製作するにも新たな物を何一つ生み出せないような拙さでは、勇猛果敢な戦になることはない。さて、右に述べた以外にも、城攻めで心得ておくべき事はまだある。それらを左に記す。

○城攻めは鉄砲を連発して放ち、貝や太鼓等を鳴らし、一斉に攻めかかるように見せ、又諸方の攻め口に人数を向かわせて不断に取り合いをさせ、又は忍を入れて城中を騒々しくさせ、又は火矢、大砲等を撃ち込んで肝を冷やさせなどして、新手を入替え、入替えて昼夜三日も敵を悩ませば、城中は大いに疲れるものである。その頃合を見定めて、総掛りで激しく攻めるならば、我に有利であると知れ。ただし、このように攻める時は、人数を数百手に分けて、それぞれに任務を与えてから行動させよ。

○城中から和睦、降参等を望むときは、よく真偽を察し、事情を明らかにして思考を廻らし、それから対応せよ。後詰が来るまでの日数を稼がなければならず、そのためにこうして計ることもある。又油断させて不意を討とうとしてこのように計ることもあるので、十分に考察せよ。

○敵将が城を出て、おめおめと降参することもあるだろう。真に降伏してきたのを殺すのは才智がない。偽って降伏してきたのを助命するのも又、才智がない。初めにも言及したように、降伏する人の甲冑、又は時勢等を十分に考察してから取扱え。これを明察と云う。

○城中の大將分が腹を切って残る人数（城兵）を助けたいと望むこともあるだろう。城を明け渡して立ち去りたいと望むこともあるだろう。これらも又、十分に察して、落度がないように取り計らえ。

○兎にも角にも、この城を枕として討死と覚悟を窮める敵もあるだろう。又、強いて突然に出撃する敵もあるだろう。後詰を待つ敵もあるだろう。よく敵の特質と事情とを察して対処せよ。

○城を落としたならば、城中の人を憐れんで、軍兵の乱妨、不作法等を厳しく禁じて安堵させるようにせよ。又は状況が許せば、城中の人らを全員城外に出して味方の列に加え、城には別に武功のある者に人数を添えて入れておくこともあるだろう。

○降伏を請う者には、あるいは領地を取上げて命だけを助けることもある。又は半地、又は本領安堵を約束する等もあり、これらは当時の状況により定めよ。

○大いに猛威を振るい、近国を震動させるときは、大祿の者は所領を失うであろうことを恐れ、小祿の者は皆殺しにされることを恐れて、必死に思い詰め、降参もしなくなるものである。このような場合に城々館々をことごとく屠^{ほふ}り落とそうとすれば、日数もかかり、人数も損害を受けるものである。これゆえに、軍略者はその張本人さえ降伏させたならば、じ余の者はその命は言うに及ばず、その所領でさえも今までのとおりにする。安堵して早々に罷り出て、大將に拝謁せよ、と所々に高札を立て、寛大で仁愛に富んだ腹中を示すのである。太閤の九州攻めなどがこの心持であった。右が城攻めの大略である。さらに昔の人が行ってきたことを考察しながら学べ。